

第14回 優秀賞(銀の星賞)受賞作品

「僕を変えた夏休み」

京都府立北嵯峨高校三年 歌津 まい



賢治のまちから
全国高校生★童話大賞



優秀賞〈銀の星賞〉

『僕を変えた夏休み』

京都府立北嵯峨高等学校三年 歌津 まい

七月十八日。夏休み前最後の日。僕はいつものように学校に登校した。教室の後ろのドアから入って一番窓側の一番後ろの席につく。位置的には後ろから二番目だけど三十五人のクラスだから後ろが空いている。だから広々と使えて僕はこの席が好きだった。僕は少し広めにイスを出して座り、読みかけの本を出した。

「おはよ」

突然聞こえた声に驚いて顔を上げると隣の席の貴文がいた。僕は「おはよ」と返した。貴文越しに祐斗の姿が見えたので、

「おはよ。祐斗」

と言った。祐斗は周りをキョロキョロと見渡した後、「おはよ。二人とも」と少し遠慮がちに笑いながら返してくれた。ただ祐斗が笑ったのは一瞬だった。

アイツらが登校してきたのだ。アイツらはランドセルを置くと、祐斗の元に集まった。一見、仲良さそうに見えるが実際は違う。祐斗はアイツらにいいじめられている。アイツらが祐斗の元に集まりだすと僕は逃げるように廊下へ出た。僕の心に住む、このモヤとした感情の名前はまだ分からない。

チャイムが鳴って教室に戻ると何事もなかったかのように先生が来て朝の会が始まる。授業がある訳でもなく、校長先生の話聞いて終業式は終わった。夏休みの宿題を配り終われば、大掃除をして帰るだけ。各班で手分けしてするので午後一時前には帰りの会が終わっていた。帰ろうとランドセルを背負った僕の耳に聞こえてきたのはアイツらの声だった。

僕は反射でそっちを見た瞬間、祐斗と目が合った。祐斗の目にはうっすら涙がにじんでいて、黒くて大きな瞳は、はつきりと僕を射抜いてきた。たった一瞬のことなのに僕には実際よりも長く感じた。またあの感情が沸いてきて、僕はそれを振り払うかのように走り出した。あの祐斗の目を記憶から消す為に一心不乱に走った。



僕はあまりにも夢中で左から来る一台の車に気が付かなかった。クラクションで我に返った時にはもう遅く、ブレーキも間に合わなかった。体の左側に強い痛みを感じて意識が遠くなっていく。この時、頭をかすめたのは祐斗のことだった。

目を開けると白い天井が見えた。鼻につく独特な匂いからここは病院なんだと気付いた。

起き上がるうとした時、左足に違和感があった。驚いてふとんを剥ぐと左足に白いギプスがはめられていた。お医者さんによると、左足の骨を折ったらしい。当分の入院が必要だと言われ、移動手段として松葉杖が渡された。少しがっかりした。

「車イスが良かったなあ」

僕の食事を用意してくれる看護士さんに言うと、「車イスは難しいよ」と言われた。

昼ごはんを食べ終わると、何もすることがなくなって退屈だった。僕はベッドに立ってかけてある松葉杖に手を伸ばした。それを使って立とうとした。右足と二本の支えで立つのは慣れなくて、バランスを取れずすぐにベッドに座ってしまった。諦めずにもう一度挑戦してみる。今度は上手くバランスを取ることが出来た。

僕は病室から一歩踏み出した。左に進んで二つ病室を過ぎると右側にたくさんベンチの並んでいる待合室があった。たまたま誰もいなくて、僕は端のソファに座った。たいした距離じゃないのに僕の体重を支えていた両手はジンジンしていた。少し休んで僕はまた歩き出した。ちょうどこの階で止まっているエレベーターを見つけたので、下ボタンを押して乗った。降りた先は一階の受付だった。僕は一番ガラス側のソファに座って手をグーパーグーパーした。脇も少し痛くなってきた。ふと外を見ると、庭があることに気付いた。空は晴れていて気持ち良さそうだったので僕はまた歩き出した。

外に出るとやっぱり日射しが暑くて、僕は日陰のベンチに座った。この病院は高い所にあるので、ベンチから街を見下ろすことが出来た。

「なーにしてんの？」

突然後ろから聞こえた声に驚いて振り向くと、そこには僕より少し年下くらしいの男の子がいた。



「何もしてないよ。ただ見てただけ」

「そっか。あっ。隣、座ってもいい？」

彼は僕が「どうぞ」と言う前に隣に座った。

「僕、ケイタ。ケイちゃんって呼ばれてる。君の名前は？」

「僕は宏亮。後藤宏亮」

「んー。じゃあ、ヒロくんだね」

これが彼ーケイちゃんーとの出会いだった。

ケイちゃんは僕と同じ年で、僕らが仲良くなるのにそう時間はかからなかった。僕らは毎日のように互いの部屋で話し合った。ケイちゃんは、心臓の病気で生まれた時からずっと病院にいるのだという。もうすぐ大きな手術があって、それが成功すれば、初めて退院できる、と嬉しそうに話してくれた。

ケイちゃんの調子がいい時は、二人で病院中を探検したりした。ケイちゃんは呼吸を整えるため、僕は手を休めるために時々休みながら病院をぐるぐると一周した。四時間くらいかけて広い院内を回ってまたケイちゃんの部屋に戻ってきた。

「松葉杖で歩くのって大変？」

「うーん、ちよっとね。でも休憩きゅうけいしながらだったし、体力には自信あるんだ」

「へえー。何かスポーツやってるの？」

「うん。野球をね」

「うらやましいなあー。そういうのダメって言われてきたからさ」

そう言ったケイちゃんは少し悲しそうな顔をした。僕は、その空気が耐えられなかった。

「ごめん、ケイちゃん。もうこんな時間だからさ。戻るね」

ケイちゃんも少し疲れたのか眠そうな顔をしていた。

「うん。そうだね。今日は楽しかったよ。ヒロくん、またあした」

いつもケイちゃんはニコニコしながら僕に手を振ってくれる。その笑顔が僕にかつての祐斗を思い出させた。僕はそれを必死に振り払った。

次の日、ケイちゃんが「外に行こう」と言ったので、あのベンチで話していた。

「ヒロくんは屋上に行ったことある？」



僕はどうして急にそんなことを聞くのか不思議に思いつつ「ないよ」と答えた。

この病院の屋上に行くには、エレベーターで五階に行ってそこから階段を使わないと行けないらしい。だから僕は行きたかったとしても行けないのだ。

「いいよね、屋上。気持ち良さそうだし、行ってみたい」

僕は言い終わってから「しまった」と思った。あわてて話を振った。

「ケイちゃんは行ったことあるの？」

「うん。昔ね。でも怖くなっちゃって」

「高い所苦手なの？」

ケイちゃんは、空を見上げた。

「ううん。そういう事じゃなくてね。なんか屋上で空を見上げた時に、空に連れて行かれそうになったんだ。なんか、ふわってしたの。それがすごく怖くて、そこから屋上に行けなくなっちゃった」

最後こそ少しふざけた口調で話していたけど、僕はケイちゃんの弱いところを見た気がしていた。

「僕の学校も屋上になれるんだ」

突然話し出した僕に驚きながらもケイちゃんは聞いてくれた。

「五年生にならないと上がれないんだけどね。僕はいつも休み時間になると仲の良かった友達……祐斗と貴文っていうんだけど、三人で屋上から空を見てたんだ」

「いいね。そういうの楽しそうだなあ」

ケイちゃんは興味を示してくれた。

僕自身、なんで今この話をしようとしたのか分からなかったけど、ケイちゃんに聞いて欲しいと思った。

「楽しかったのは五年生の間だけ、六年生になってすぐぐらいから祐斗はいじめられるようになったんだ。原因は当時いじめられていた祐斗の幼なじみの貴文をかばったこと。祐斗は正義感が強くて僕にとっても正義のヒーローみたいだった」

話していくうちにあの時の祐斗の顔が思い出された。

「でも僕は祐斗を守れなかった。いじめたりはしなかったけど見て見ぬふりをした。あいさつぐらいしかしなくなったし、屋上にも行かなくなった。夏



休みの始まる最後の日、また見て見ぬふりして帰ろうとした時に一瞬、祐斗と目が合ったんだ。あの時のことは鮮明せんめいに覚えてるんだ。そして思い出す度に、モヤモヤするんだ」

僕の目から涙が溢あふれて、無意識に手に力が入っていた。高まった感情が落ち着いてきて、この感情の名前が分かった。

「そうか。僕はずっと悔しかったんだ。祐斗を助ければ、次は僕がいじめられるんじゃないかって怯おびえて一歩を踏みだせない自分のことが。祐斗にとつてのヒーローになる勇気のない僕が」

力の入った僕の手にはケイちゃんの手が重なった。

「大丈夫だよ。ヒロくん。だって助けられなかったことを後悔してるんでしょ？」

僕は大きくうなづいた。

「なら、今度こそ後悔しないようにヒロくんが祐斗くんのヒーローになってあげるんだ。大丈夫、ヒロくんには僕がいる。友達でしょ」

ケイちゃんは僕の目を見て言った。ケイちゃん言葉には僕の心を温かくする魔法がかかっているみたいだ。目をこすって僕は、

「うん。今度は僕が守ってみせる。ケイちゃんのおかげで勇気が出たよ。ありがとう」

と言った。ケイちゃんは少し照れていた。

「ケイちゃんが元気になったら、四人で遊ぼうよ」

「うん。絶対治すよ。手術がんばるね」

ケイちゃんは笑顔でそう言った。

気が付くと日が暮れかけていたので僕たちは「また明日」そう言って別れた。

次の日。その日は僕のギプスがとれる日だった。手になじんできた松葉杖と別れて、また自分の足で歩くことになった。

僕はこのことを真っ先に伝えたくてケイちゃんの部屋に行った。

「ケイちゃん見て！自分の足で……。えっ」

いつもなら「どうしたの？」と笑ってくれるケイちゃんの姿がそこに無かった。



いやなことしか思いつかなくて、僕は看護士さんを探した。やっと見つけた看護士さんが、ケイちゃんは手術のために病室を移動したということ、そこに僕は入れないということを教えてくれた。

僕は半分ほっとし、半分残念な気持ちで自分の部屋に戻った。何もすることがない日は初めてで、僕はケイちゃんのことを色々思い出していた。

僕がしていた夏休みの宿題を珍しそうに見ていたケイちゃん。一緒に見た花火やこっそり見に行った流星群（結局、見つかって怒られたっけ）。この夏の思い出のアルバムには僕の隣に常にケイちゃんがいた。

僕にできることは手術の成功を祈るだけだった。

それから二日後、八月も終わろうとしている頃。僕はケイちゃんに「バイバイ」と言えないまま退院の日が来た。僕は看護士さんから一通の手紙と手作りのストラップをもらった。送り主はケイちゃん、部屋を移動する前に預けたのだという。

僕はそれを読んだ。

内容は、遊んでくれてありがとうという感謝や楽しかったなどケイちゃんらしい字で書いてあった。手紙の最後には、

“ ヒロくんには僕がいる。がんばれ!”

と、どの文字よりも大きく書いてあった。ストラップは昔から作るのが好きだったというケイちゃんの手作りのものだった。

でも僕は嬉しさの反面、悲しい予感を感じずにはいられなかった。

八月二十五日。夏休み明け最初の日。登校日に行けなかった僕は誰よりも大荷物で学校に向かった。

教室に入ると、既に貴文も祐斗も来ていた。

僕はとりあえず形だけの「おはよ」と言っただけで自分の席についた。

その時アイツらが登校してきた。ランドセルを置くやいなや祐斗の所に集まった。

僕は覚悟を決めて立ち上がった。しかし、祐斗の所に行こうとする僕の手を貴文がつかんだ。静かに首を横に振る貴文の目は「やめときなよ」と言ってきた。

「貴文、手を離して。僕は決めたんだ。もう見て見ぬふりをするのはやめようって。後悔はもうしたくないんだ。僕は祐斗を守りたい。そう誓ったんだ」



僕はポケットの中からストラップを出して握りしめた。ケイちゃんが近くにいてくれる気がする。

「ケイちゃんが『頑張ってる』って僕を応援してくれたんだ。僕は一人じゃないんだ」

僕はそっと貴文の手をほどいた。僕はストラップを戻し、祐斗の元へと歩んだ。

「おい。やめろよ」

自分でも驚く程、低い声が出た。

祐斗を囲んでいたアイツらは驚いた顔でこっちを見た。

「なんだよ後藤。お前もいじめられたいのか」

「ちがうよ。ただこんなことは、やめろって言うてるの」

「なんでお前に命令されなきゃなんねーの」

そう言っただけの肩をドンッと押した。押された僕は、よろけて机と椅子を倒してしまった。その音でクラス中がこっちを見た。

キーンコーンカーンコーン

タイミング良くチャイムが鳴って、先生が入ってきた。焦って席に戻ろうとするアイツらの一人の腕をとっさに掴んだ。

「ふざけんなよ……。ふざけんな！ 先生の前で堂々とできねえんなら、初めからイジメなんてすんなよ！」

普段あまり感情的にならない僕が怒鳴った事で教室中がシーンとした。アイツらは何か言いたくても言えない、そんな顔をしていた。

「どうということかな。後藤くん」

きつと何も知らないであろう先生が僕に聞いてきた。興奮していた僕は、自分のことを棚たなに上げて、先生に対してもイラついていた。

「彼らが祐斗をいじめていたんです」

僕の代わりに答えたのは貴文だった。そして頭に血が上っている僕の手をとって、

「宏亮のおかげで僕も覚悟が決められた。ずっと祐斗のことをなんとかしたいって思ってた。元はといえば、僕のせいだからさ……」

と涙ぐみながら言った。僕はそんな貴文を見て落ち着きを取り戻した。

祐斗がゆっくり僕たちに歩み寄ってきて、



「ありがとう。助けてくれて」

そう言って僕と貴文の手に自分の手を重ねた。そして僕たちは、元の友達に戻った。

その間、先生とアイツらは教室の隅で話し合いをしていた。アイツらは、いじめていた事を認め、二人に謝ってきた。僕は正直、許す気にはなれなかったけど、二人が許すと言ったので僕も許すことにした。しかし、一応祐斗の席を動かすことになった。祐斗は、僕の右斜め後ろ、つまり貴文の後ろの席になった。僕には少し不思議な事があった。僕の後ろは何もなかったはずなのに、椅子と机が用意されていたのだ。

「まあ、ちょっと色々あったけど大ニユースです。このクラスに転校生がやってきました」

先生の発言にクラス中がざわついた。

「はい静かにね。ちょっと待たせちゃったけど、入ってきていいよ」
クラス中の視線がドアに集まっていた。

「失礼します」

入ってきたのは男の子だった。半袖、半ズボンで元気な感じだけど、手足が細くて服がブカブカだった。一番違和感を与えていたのは、六年生にもなるのに一年生かと思うくらいピカピカなランドセルだった。

僕は彼を見た瞬間叫ばずにはいられなかった。

「ケイちゃん！」

転校生として入ってきたのは、この夏、僕を変えてくれたケイちゃんだった。ケイちゃんは少し恥ずかしそうに僕に手を振ってくれた。

「えっと。初めまして。遠山慶太です。慶ちゃんって呼んで下さい」

そう言ってニコツと笑った慶ちゃんは、僕のよく知る慶ちゃんだった。慶ちゃんは、もちろん僕の後ろの席に座った。隣の貴文が僕の机をトントンとたたいた。

「宏亮がさっき言ったのって遠山くんの事？」

「そう。僕の友達」

「なら、僕達の友達だね」

祐斗の心からの笑顔を久しぶりに見た。



慶ちゃんは持ち前の笑顔と人懐っこさで休み時間になる頃には、すっかり二人と打ち解けていた。

「ヒロくん、休み時間だって。何しよっか？」

慶ちゃんは、ずっとソワソワしていた。

僕は全てが元に戻ったらやりたかった事を三人に言った。

「慶ちゃん、祐斗、貴文。これから屋上に行ってみない？」

三人共、驚いていた。

「いいね。行きたい！」

慶ちゃんは、今まで見たこともないくらいの眩^{まぶ}しい笑顔でそう言った。